

春（二月、三月、四月）

二月

- 1 春立ちてぺんぺん草の畑かな 禾風居
- 2 梅檀のほろほろ落る二月かな 子規
- 3 枯枝に初春の雨玉圓か 虚子
- 4 早春の流水早し猫柳 泊雲
- 5 白雲や雪解の澤へうつる空 太祇
- 6 雪消えて麥一寸の野づらかな 關更
- 7 曲り家の南部の屋根や雪残る 水竹居
- 8 春いまだ田毎の雪間々々かな 白雄
- 9 三日月はそるぞ寒はさえかへる 一茶
- 10 はる寒く葱の折ふす畠かな 太祇
- 11 春寒し荒神松の深みどり 梅室
- 12 古き世の火色ぞ動く野焼かな 蛇笏
- 13 野を焼くや棚曇りして二三日 花蓑
- 14 しのゝめに小雨振出す焼野かな 蕪村
- 15 藪かげに延過しけり露の臺 關更
- 16 春もやゝけしきとゝのふ月と梅 芭蕉
- 17 紅梅の苔は固し言はず 虚子
- 18 うぐいすや茶の木畑の朝月夜 文章
- 三月
- 19 春雪のしばらく降るや海の上 普羅
- 20 春めきし山河消え去る夕かげり 虚子
- 21 春山や松に隠れて田一枚 鬼城
- 22 温む水に黒く全き朽葉かな 橙黄子
- 23 春の水山なき國を流れけり 蕪村
- 24 たふれ木に添てねぐるや春の水 梅室
- 25 田にし鳴小田にたむぼぼ打ほけぬ 曉臺
- 26 尊生ふる水の高さや山の池 虚子
- 27 鳥雲に歸る國なき鴉かな 瓦全
- 28 歸る雁田ごとの月の雲る夜に 蕪村
- 29 わかれわかれままつ山越えて歸るかり 曉臺
- 30 一本の枯木がくれの歸雁かな 虚子
- 31 山寺の扉に雲遊ぶ彼岸かな 蛇笏
- 32 あたたかな雨が降るなり枯律 子規
- 33 雲雀より上にやすらふ峠かな 芭蕉
- 34 朝風やただ一すちにあげ雲雀 蓼太
- 35 雨晴れて燕竝ぶ垣根かな 士朗
- 36 尊生ふ池のみかさやはるの雨 蕪村

37

- 37 行くさきに日輪うつり春の泥 泊雲
- 38 耕や鳥さへ啼ぬ山陰に 蕪村
- 39 骨柴のかられながらも木の芽かな 凡兆
- 40 けしき立つ谷の木のめの曇かな 白雄
- 41 西日して木の芽花の如し草の宿 鬼城
- 42 芽柳の吹かれてもどるときゆるし 草也
- 43 芽を吹きて柳もつるゝこと多し 虚子
- 44 落ちざまに水このしけり花椿 芭蕉
- 45 起ふしに眺る春の野山かな 關更
- 46 春なれや名もなき山の朝がすみ 芭蕉
- 47 陽炎のもえて田に散る椿かな 曲翠
- 48 陽炎や柳に残る宵の雨 素蘭
- 四月
- 49 日が永い永いとのらりくらりかな 一茶
- 50 徐に眼を移しつゝ初櫻 虚子
- 51 梨花白し雨夜なれども月明り 虚子
- 52 山越えて伊豆へ來にけり花杏子 たかし
- 53 大空や春の暁おほどかに 虚子
- 54 入あひのかねもきこえずはるのくれ 芭蕉
- 55 暁の春の御あかし消ゆるまゝ 虚子
- 56 炭がまのけぶりのはたの春の月 蒼虬
- 57 川下に綱うつ音やおぼる月 太祇
- 58 蝌蚪一つ落花を押しして泳ぐあり 泊月
- 59 垣ごしにとらへてはなす柳かな 遠水
- 60 町中へしだるゝ宿の柳かな 利牛
- 61 しばらくは花の上なる月夜かな 芭蕉
- 62 下からも見上げて居るや花吹雪 泊月
- 63 月光西にわたれば花影東に歩むかな 蕪村
- 64 くらがりの花は静かに散りつづく いはほ
- 65 さまざまの事おもひ出す櫻かな 芭蕉
- 66 苗代の水にちりうくさくらかな 許六
- 67 春の海終日のたりのたりかな 蕪村
- 68 むらさきに夜は明かるゝ春の海 几童
- 69 汐干瀉雨しとしと暮かゝる 一茶
- 70 菜の花や月は東に日は西に 蕪村
- 71 うら若き川原蓬やはるの風 白雄
- 72 ほろほると山吹ちるか瀧の音 芭蕉
- 73 小川二つ竝び流るゝ杉菜かな 虚子

- 74 苗代の水田に晝の雲動く 肋骨
75 別れ霜ありしと聞くや牡丹の芽 虚子
76 古池や蛙飛びこむ水の音 芭蕉
77 美しき砂に小松のみどりかな 士朗
78 ほそぼそと藤の間を降小雨かな 只丸
79 池のふねへ藤こぼるゝや此夕べ 太祇
80 ゆく春や逡巡として遅ざくら 蕪村

夏（五月、六月、七月）

五月

- 81 牡丹散りてうちかさなりぬ二三片 蕪村
- 82 日々に色かはりゆく新樹かな 虚子
- 83 をちこちに瀑の音聞く若ばかな 蕪村
- 84 道のべの低きにほひや茨の花 召波
- 85 朝燕麥穂の露の眞白なる 泊雲
- 86 雨二滴日は照りかへす麥の秋 虚子
- 87 麥藁の散らばる道のおそこゝ 虚子

六月

- 88 六月や峯に雲置くあらし山 芭蕉
- 89 町中の山やさつきの上り雲 丈草
- 90 手のとどく水際うれしかきつばた 宇多都
- 91 みじか夜の満月かゝる端山かな 乙二
- 92 紫陽花のあさぎのまゝの月夜かな 花蓑
- 93 咲きのぼる梅雨の晴間の葵かな 成美
- 94 梅天に鬱然たりや樟榎 月斗
- 95 五月雨や物干し竿にかたつぶり 也有
- 96 五月雨や庭を流る々竹の皮 吟江
- 97 五月雨や月夜に似たる沼明り 芋銭
- 98 手ばなせば夕風やどる早苗かな 芭蕉
- 99 草の葉を落るより飛ぶ蜚かな 芭蕉
- 100 もつれつゝ水無瀬をのぼる蜚かな 樗良
- 101 浮草や蜘蛛渡りあて水平 鬼城
- 102 箔散るやぬなほの花の水の上 曾北
- 103 しゝめや鶴をのがれたる魚浅し 蕪村
- 104 蜘蛛の圍の破れしこの徑誰が行きし 虚子
- 105 月の面に蝙蝠屢々かゝりけり 泊雲
- 106 波の上に流れ藻長き南風かな 橙黄子
- 107 鳶の巢の蕪吹き散るや青嵐 吟江
- 108 傾けて新樹を吹けり青嵐 温亭
- 109 薫風や千山の緑寺一つ 子規
- 110 ほととぎす啼くや五尺のあやめ草 芭蕉
- 111 光りあふ二つの山の茂りかな 去来
- 112 たうたうと瀑の落こむ茂りかな 士朗
- 113 木々の根の左右より迫る木下闇 虚子
- 114 あらたうと青葉若葉の日の光 芭蕉
- 115 ゆらゆらと杉の間の夏の蝶 琅玕子
- 116 瀧ちかく草にすがりぬ夏小蝶 より江

117

夏草や兵共がゆめの跡 芭蕉

- 118 青蔦の皆葉尖より雫かな 徂春
- 119 若竹や鞭の如くに五六本 茅舎
- 120 から池へひらひら竹の落葉かな 王城
- 121 雨ながら月夜になりぬ鳴水鶏 成美
- 122 落ちて居る胡瓜の花や五月晴 羽城
- 123 梅雨晴や前山に雲納まらず 虚子
- 124 おもだかのふとりすぎたる暑さかな 嵐雪
- 125 薺の二葉にうくる暑さかな 去来

七月

- 126 七月の蝌蚪が居りけり山の池 虚子
- 127 古家や草の中より百合の花 成美
- 128 山百合の置いてありけり峠茶屋 水竹居
- 129 象潟や雨に西施が合歡花 芭蕉
- 130 山裾を白雲わたる青田かな 虚子
- 131 風そひて夕立晴る野中かな 白雄
- 132 虹の輪のうすらぎつゝもまだありぬ 草坡
- 133 大木を見てもどりけり夏の山 關更
- 134 圓虹に立ち向ひたる巖かな 泊月
- 135 緑わく夏山陰の泉かな 蕪太
- 136 廣き葉のかさなり映る泉かな 禪寺洞
- 137 さざれ蟹足はひのぼる清水かな 芭蕉
- 138 水涼しひらひら見ゆる魚の腹 坡仄
- 139 蛸壺やはかなき夢を夏の月 芭蕉
- 140 赤道の夕焼雲に船は航く 虚子
- 141 三伏の夕べの星野ともしりけり 禪寺洞
- 142 蜘蛛の巢に月さしこんで夜の蟬 一茶
- 143 月の出の漸くさびし夜光蟲 石鼎
- 144 雨の輪も古きけしきや蒲の池 虚子
- 145 黎明の雨はらはらと蓮の花 虚子

秋（八月、九月、十月）

八月

- 146 秋もはや雁下り揃ふ寒さかな 野坡
- 147 花ながら秋となりけり池の蓮 大魯
- 148 ひらひらと木の葉動きて秋ぞ立つ 鬼貫
- 149 横雲のちぎれて飛ぶや今朝の秋 北枝
- 150 親よりも白き羊や今朝の秋 鬼城
- 151 水の蜘蛛一葉に近く泳ぎ寄る 其角
- 152 涼しさや願の絲の吹たまる 乙二
- 153 夜明まで雨吹く中や二つ星 丈草
- 154 真夜中やふりかはりたる天の川 芭蕉
- 155 天の川星より上に見ゆるかな 白雄
- 156 川べりに線香とぼるお盆かな 續人
- 157 高燈籠松の木の間に見ゆるかな 五才長皿
- 158 盆の月寝たかと門を叩きけり 野坡
- 159 精霊舟つづき流れてまはるあり 素十
- 160 精霊舟おもひおもひの汀より 一甫
- 161 流燈や一つにはかに遡る 蛇笏
- 162 送火のなかなか消えでなほ淋し 和香女
- 163 風そひて更に明るし大文字 常悅
- 164 大文字を待ちつつ歩く加茂堤 虚子
- 165 小屋涼し花火の筒の割るる音 其角
- 166 庭に出て線香花火や雨あがり 立子
- 167 蝸や山田を落る水の音 飄風
- 168 かなかなのひびきて水の廣さかな 紅洋
- 169 菜畠に残る厚さや瓜の苗 許六
- 170 そよそよや藪の内より初嵐 日藁
- 171 新涼の雨や芭蕉をひるがへし 巖
- 172 稲妻やきのふは東けふは西 其角
- 173 立出でて芙蓉の洞む日に逢へり 白雄
- 174 手を掛けて折らで過行木槿かな 杉風
- 175 白木槿夏華も末の一二輪 召波
- 176 去年の蔓に薺かかる垣根かな 素堂
- 177 朝顔の蒼かぞへん薄月夜 田上尼
- 178 朝顔は末一りに成りにけり 舟泉
- 179 朝顔の裂けてゆゆしや濃紫 石鼎
- 180 暁の紺朝顔や星一つ 虚子
- 181 此邊の道はよく知り赤のまま 虚子
- 182 此村の見ゆる限りは花たばこ 央嶺
- 183 芭蕉野分して盃に雨を聞く夜かな 芭蕉

184

露はれて露の流るる芭蕉かな 白雄

九月

- 185 飛んで居る二百十日の蜻蛉かな 孤舟
- 186 颱風の名残の驟雨あまたたび 虚子
- 187 大竹の藪吹きよせる野分かな 木導
- 188 船頭の棹とられたる野分かな 蕪村
- 189 浅川の水も吹散る野分かな 太祇
- 190 戸明れば月赤き夜の野分かな 關更
- 191 秋出水乾かんとして花赤し 普羅
- 192 竹縁の青き匂ひや初月夜 如竹
- 193 三日月に必ず近き星一つ 素堂
- 194 夕月や子等が遊びし草結び 漾人
- 195 住む方の秋の夜遠き火影かな 蕪村
- 196 稲塚に月のあがりしよなべかな 掛塘
- 197 道筋の細う暮れたる花野かな 風國
- 198 一筋は花野に近し畠道 鳥粟
- 199 廣道へ出て日の高き花野かな 蕪村
- 200 東に日の沈みある花野かな 虚子
- 201 山は暮れて野は黄昏の芒かな 蕪村
- 202 寂しさの年々高し花芒 几童
- 203 花少し閉ぢて撫子暮るるかな 衣沙櫻
- 204 雨寒や石にもたれて桔梗咲く みさ子
- 205 雨の日やもたれ合たる女郎花 九湖
- 206 見るうちや風の吹折る女郎花 樗良
- 207 藤袴吾亦紅など名にめでて 虚子
- 208 大土手の葛のあらしのうねづたひ 青邨
- 209 雨晴や煙のこもる葛の花 嵐竹
- 210 葛の花水に引きずる嵐かな 一茶
- 211 しら露もこぼさぬ秋のうねりかな 芭蕉
- 212 いづくにかたふれ臥とも秋の原 曾良
- 213 枝に葉に花の付たり雨の秋 關更
- 214 白萩のはやくも過ぎし盛かな 草亡川
- 215 朝露や浪やはらかに磯の草 太祇
- 216 土くれにはえて露おく小草かな 鬼城
- 217 白露に鏡のごとき御空かな 茅舎
- 218 菜畠や二葉の中の蟲の聲 來山
- 219 蟲聞くや庭木にとどく影法師 素十
- 220 草むらや螿螂蝶を捕へたり 虚子

259 初潮に追れてのぼる小魚かな 蕪村
 258 初潮や岬へつづく石燈籠 泊月
 257 月清し遊行のもてる砂の上 芭蕉
 256 吹風の相手や空に月一つ 凡兆
 255 松かげのはや月にてぞ有にける 士朗
 254 ふるさとの月の港をよぎるのみ 虚子
 253 山畑に猪の子来たり今日の月 桃隣
 252 名月や船なき磯の岩傳ひ 太祇
 251 名月や只美しく澄みわたる 樽良
 250 名月や律の宿にかへりけり 成美
 249 川ぞひの島をありく月見かな 杉風
 248 芋の葉の打かさなりし良夜かな 猪子
 247 コスモスのそよりそよりと良夜かな 俳子
 246 雨の月どころもなしの薄明り 越人
 245 浦風に蟹も来にけり芋畠 太祇
 244 やすやすと出ていさよふ月の雲 芭蕉
 243 十六夜や慥に暮るる空の色 去来
 242 秋霧に河原撫子見ゆるかな 一茶
 241 朝霧のふかき嵯峨野の野辺送り 三千女
 240 白壁に蜻蛉過ぐる日影かな 召波
 239 秋の季の赤蜻蛉に定りぬ 白雄
 238 干草に影落しとふ蜻蛉かな 致格
 237 一杭にとまらんとして二蜻蛉 途子
 236 松の木に吹あてられな秋の蝶 舟泉
 235 秋蝶や翅小きざみに草うつり 枳童
 234 一行の雁や端山に月を印す 蕪村
 233 雁がねの重なり落つる山辺かな 樽良
 232 曼珠沙華に稲被さるや土手の秋 碧堂
 231 鶏頭のいただきに降る小雨かな 禪寺洞
 230 朝涼し葉を立てて伸ぶ葉鶏頭 晨生
 229 絶壁の下に径あり秋の海 聆子郎
 228 網を干すあひだあひだに秋の海 一誠子
 227 はつきりと鱸の波の見えて来し 双曹子
 226 鱸雲畫のままなる月夜かな 花蓑
 225 菱取の岸ばかり漕ぐ小舟かな 夕雨
 224 水馬ばかりの池や竹の春 麥村
 223 陰気なる秋海棠の小庭かな 虚子
 222 大風の紫苑見て居る垣根かな 乙二
 221 紫苑吹く浅間嵐の強き日に 虚子
 260 紫の花の乱れや鳥かぶと 惟然
 259 コスモスや風に撓みてもれもなし 爽雨
 258 月草の花に離れてうてなかな 虚子
 257 月出でて明るく暗し蕎麦の花 零餘子
 256 とり入るる夕の色や唐辛子 虚子
 255 過ぎ行くや木犀匂ふ夜の門 竹の門
 254 茫々と芒折れ伏す秋の水 曉臺
 253 秋水に孕みてすすむや源五郎蟲 鬼城
 252 十月
 251 鶏頭にしみつく秋の入日かな 吾仲
 250 秋の空尾上の杉に離れたり 其角
 249 刈株や水田の上の秋の雲 酒堂
 248 橋見えて暮かかるなり秋の雲 一茶
 247 少しづつみざる景色や秋の雲 鬼城
 246 秋の山どころどころに煙立つ 曉臺
 245 あかあかと日は難面も秋の風 芭蕉
 244 夕焼の百姓赤し秋の風 許六
 243 蔓草や蔓の先なる秋の風 太祇
 242 秋風や舟より舟へ行く鳥 士朗
 241 軒下の田水あかるし秋の風 梅室
 240 秋風の吹けば蝶々むらがる 素十
 239 此道や行く人なしに秋の暮 芭蕉
 238 立出る秋の夕や風ほろし 凡兆
 237 のびのびて衰ふ菊や秋の暮 許六
 236 秋の葉の池に立竝ぶや秋の雨 丈草
 235 緑端の濡れて侘しや秋の雨 太祇
 234 秋もはや岩に時雨れて初紅葉 許六
 233 肌さむし竹切山のうす紅葉 凡兆
 232 紅葉してそれも散行く櫻かな 蕪村
 231 心憎き茸山越ゆる旅路かな 蕪村
 230 再びのうすき夕日や菌山 吾界
 229 茸山の蓆の客となりにけり 虚子
 228 刈草に蝗飛ぶ音ありにけり 巴峽
 227 山風に笠取られたる案山子かな 鼠弾
 226 落し水田毎の闇となりにけり 蕪村
 225 かはせみの鶺鴒追うて秋の川 水竹居
 224 行秋のところどころや下り築 蕪村
 223 朝焼の空こそあかき渡り鳥 木導

押合うて熟柿を落す目白かな 凍郊
 緋連雀一斉に立つてもれもなし 青畝
 冷たさにつやつや紅き木の實かな 禾人
 里古りて柿の木持たぬ家もなし 芭蕉
 柿ぬしや梢はちかき嵐山 去来
 草庵の四方の窓なる柿の秋 野風呂
 釣柿の影のながれし障子かな 熊六
 山葡萄熟れてこぼるるばかりなり 雁來紅
 蔓切れて揺るる通草を仰ぎけり 花櫻
 手のとどくところにありぬ鴉瓜 梓月
 道を塞いで秋の祭の獅子つかひ 淡紅
 秋は先づ目に立つ菊の苔かな 去来
 白菊や庭に餘りて畠まで 蕪村
 夕風や盛りの菊に吹き渡る 蕪村
 浮雲のをりかさなるや後の月 十丈
 十月の今宵は時雨後の月 蕪村
 大風にさわげる蘆を刈りはじむ 虚洞
 一張羅破れそめたる芭蕉かな 茅舎
 破れゆく芭蕉の風は衰へず 句星鬼
 横に敗れ縦に破れし芭蕉かな 虚子
 敗荷の池をめぐりて詣でけり 言人
 山見えぬ山ふところの栗林 左右
 稲刈りて小草に秋の日の當る 蕪村
 落穂拾ひ日當る方へ歩み行く 蕪村
 黒雲にくわつと日のさす紅葉かな 木導
 白河も黒谷もみなみぢかな 嵐山
 月に寝て夜半きく雨や紅葉宿 素十
 裏山の日なき紅葉に下りけり 素十
 伏して見る水の早さや紅葉狩 虚子
 石山の石にも蔦の裏表 乙洲
 藁垣に蔦一連の紅葉かな 躑躅
 蔦の葉の二枚の紅葉客を待つ 虚子
 真先に河原ささげの紅葉かな 十丈
 未枯の中に道ある照葉かな 蕪村
 未枯やほろりと落つる蝸牛 省戊
 長き藻も秋行く筋や水の底 召波
 行秋やあからさまなる水の面 温亭
 松風や軒をめぐつて秋暮ぬ 芭蕉

冬(十一月、十二月、一月)

十一月

372 371 370 369 368 367 366 365 364 363 362 361 360 359 358 357 356 355 354 353 352 351 350 349 348 347 346 345 344 343 342 341 340 339 338 337 336 335

禪寺の松の落葉や神無月 凡兆
 凧に葉守の神も旅出かな 北溟
 淋しさやけさ立し神の小柴垣 田杜
 留守のまにあれたる神の落葉かな 芭蕉
 いみじくもかがやくゆずや神の留守 青畝
 しぐれつつ留守守る神の銀杏かな 虚子
 鳶の羽もかいつくろひぬ初しぐれ 去来
 初霜や嵩減り枯れて箒草 泊雲
 洪柿をながめて通る十夜かな 裾道
 茶の花のわづかに黄なる夕かな 蕪村
 茶の花に隠れんぼする雀かな 一茶
 茶の花に暖き日のしまひかな 虚子
 山茶花や小雨に庭の薄明り 梅壽
 山茶花やまろく刈られて花ざかり 梓月
 たくましく八手は花に成にけり 尚白
 落つ雨にすぐ掃きやめぬ石路の庭 汀女
 刈あとやものに粉ぬ蕎麦の茎 芭蕉
 蕎麦刈の日向うすれて嚏かな 秋灯
 麥蒔の影法師長き夕日かな 蕪村
 晝の月麥まく人のながめかな 吟江
 二三本母大根を残しけり 一茶
 投懸けて樹々に干しある大根かな 長
 干大根手近の木へとはこぶなり 草火
 富士見ゆる日がつづきけり干大根 夢汀
 切干に束の間の日をたのみかな とせを
 蓮堀ののこせし焚火燃えゐたり 迷子
 蓮堀にかはせみ低くとびにけり 照子
 鷹一つ見つけてうれし伊良古崎 芭蕉
 青空や鷹の羽せせる峯の松 鬼貫
 虹の影障子にとまる小春かな 也有
 小春日や石を噛みゐる赤蜻蛉 鬼城
 天照や梅に椿に冬日和 鬼貫
 落初めし椿もありて冬ぬき 秋皎
 十月の櫻つぼめる木かげかな 白雄
 ははき木の梢はここぞ歸り花 召波
 真青な葉も二三枚返り花 素十
 十分に紅葉の冬と成にけり 曉墓
 ちり紅葉かさりこそりと枝傳ふ 野風呂

409 408 407 406 405 404 403 402 401 400 399 398 397 396 395 394 393 392 391 390 389 388 387 386 385 384 383 382 381 380 379 378 377 376 375 374 373

散紅葉色つらなりて流れけり 蕪人
 寒山と拾得とよる落葉搔 許六
 西吹ばひがしにたまる落葉かな 蕪村
 花もなき水仙埋む落葉かな 太祇
 藤棚のうへからぬける落葉かな 太祇
 落葉より湧き出し水の白さかな 青史
 一面の銀杏落葉を踏み行けり 水府
 うす青き銀杏落葉も置きそめし たかし
 水底の岩に落つく木の葉かな 丈草
 さまざまの木葉あつまる山路かな 枳風
 木がらしの空見直すや鶴のこゑ 去来
 凧に二日の月のふきちるか 荷兮
 凧や日も照り雪も吹きちらす 樗良
 凧や海に夕目を吹き落す 漱石
 楠の根をしづかにぬらす時雨かな 蕪村
 網代木のそろはぬかげを月夜かな 白雄
 槇の鳥見ゆる網代のかかりかな 曉墓
 十二月
 短日の扉にもたせて箒あり 旭川
 冬の日やとけては氷る忘れ水 一鼠
 一本の木にかがやける冬日かな 青圃
 旅空や凍雲もる日一筋 王城
 たのみなき若草生ふる冬田かな 太祇
 雨水も赤くさび行冬田かな 太祇
 水鳥を吹きあつめたり山おろし 蕪村
 ただ一羽離れていくか鴨の聲 蓼太
 里過て古江に鳶を見付けたり 蕪村
 野の池や氷らぬ方にかいつぶり 几董
 初雪や水仙の葉の撓むまで 芭蕉
 有明にふり向がたき寒さかな 去来
 日の落ちて頬に冷き手をあてぬ あふひ
 こまごまと星をやどせる冬木かな 槐
 冬木立いかめしや山のたたずまひ 其角
 尾をしがみ風の枯木の小鳥かな 虚子
 枯柳雀の腹の見えにけり 且藁
 冬ざれや小鳥のあさる葦畠 蕪村
 大石や二つに割れて冬ざる 鬼城
 いささかな草も枯けり石の間 召波

446 445 444 443 442 441 440 439 438 437 436 435 434 433 432 431 430 429 428 427 426 425 424 423 422 421 420 419 418 417 416 415 414 413 412 411 410

ほそ道の日はちらちらと草枯るる 土秋
枯蔓の消えきえわたる籬かな 泊月
ともかくもならでや雪のかれ尾花 芭蕉
枯れかれて光をはなつ尾花かな 几童
枯蘆の日にひに折れて流れけり 關吏
蓮の茎傾き合ひて枯れにけり 泊雲
枯芝を見居れば雨の弾きけり 月斗
里佐しかけ菜が下のつり階子 白雄
大木の伐り倒しあり冬の山 梧月
松杉をふところにして山眠る 平陽
旅に病で夢は枯野をかけ廻る 芭蕉
よわよわと日のゆきとどく枯野かな 麥水
むささびの小鳥はみ居る枯野かな 蕪村
遠山に日の當りたる枯野かな 虚子
あら磯やはしり馴たる友衛 去来
吹かれ来て豊に上る千鳥かな 乙由
日によする波美しや朝衛 來道
炭を焼く長き煙の元にある 草田男
日の當る焚火煙や濃紫 虚子
坐り雲動き出しぬ日向ぼこ 月尚
北風や浪に隠るる佐渡ヶ島 月斗
ひつぢ田に霜の花見る朝かな 芭蕉
霜百里舟中に我月を領す 蕪村
雪圍いとまびしくぞ結ばれる 雨圃子
面白し雪にやならん冬の雨 芭蕉
庭白し曇やつもる夕月夜 宗春
瀧涸れて一枚巖となりけり 櫻坡子
狐火や鬮體に雨のたまる夜に 蕪村
ふゆのよやまことしからぬ稲光り 曉臺
この木戸や鎖のさされて冬の月 其角
正月の花桶にある師走かな 躑躅
流れ木のあちこちとしてし暮ぬ 一茶
山門のひらかれてあり除夜詣 宵火
一月
けさ春の水ともなし水の槽 召波
年明けて又珍らしや松の雪 一之
年立や雨落ちの石凹む迄 一茶
元日に田ごとの日こそこひしけれ 芭蕉

485 484 483 482 481 480 479 478 477 476 475 474 473 472 471 470 469 468 467 466 465 464 463 462 461 460 459 458 457 456 455 454 453 452 451 450 449 448 447

元日やおもへば淋し秋の暮 芭蕉
元日や草の戸越の麥畠 召波
ふるさとの伊勢なほ戀し初日影 樗良
しづかさの鎌にさし入る初日かな 蓼太
重なりて島の長さや初日の出 綠琅
初空や船なき海に日の出る 百池
初風の岩より舟に乘れといふ 茅舎
櫟の茎も紅さすあしたかな 園女
ふたもとはかたき苔や福寿草 召波
初夢に故郷を見て涙かな 一茶
寒鯉に一すぢの日のさしにけり 一魯
手拭も豆腐も氷る横川かな 蕪村
地球凍てぬ月光之を照しけり 虚子
中天に月冴えんとしてかかる雲 虚子
いきみたつ鷹引据る霞かな 芭蕉
匂ひなき冬木が原の夕あられ 去来
冬の情月明らかなられ降 曉臺
日ねもすの風花淋しからざるや 虚子
ひごろにくき鳥も雪の朝かな 芭蕉
ながながと川一筋や雪の原 凡兆
長橋の行先かくす吹雪かな 太祇
たたずめば猶ふるゆきの夜路かな 几童
いざゆかん雪見にころぶ所まで 芭蕉
とる年もあなた任せぞ雪佛 一茶
雪折も聞えて暗き夜なりけり 蕪村
朝日かげさすや氷柱の水車 鬼貫
算水吹き散る篠の氷柱かな 白天
寒月や枯木の中の竹三竿 蕪村
寒雨降りそそげる中の枝垂梅 虚子
潮かぶる石垣ありく寒鴉 舟居
寒菊に南天の實のこぼれけり 曉臺
水仙の花のうしろの蕾かな 立子
麥はえてよき隠家や畠村 芭蕉
大寒の波かぶりある小舟かな 吐牛
冬の梅きのふやちりぬ石の上 蕪村
寒梅やほくちにうつる二三輪 蕪村
うつくしく交る中や冬椿 鬼貫
冬椿乏しき花を落しけり 草城
侘助のひとつの花の日數かな 青歌